

第2号

発行 三島信用金庫  
静岡県三島市新谷155の1  
055-981-0121

制作 静岡県立三島高等学校新聞部  
静岡県立熱海高等学校新聞部  
日本大学三島分校新聞部

協力 静岡県東部支援局

# 地域の魅力を考える

東部・伊豆地区の魅力を再確認することを目的とする本紙。今回は副知事・高校生意見交換会と地域に根差す企業の取り組みを取材しまとめた。

## 土屋副知事と高校生による意見交換会



▲高校生に熱く語りかける土屋副知事(左)

11月3日(金)、静岡新聞社内において土屋優行静岡副知事と高校生の意見交換会が行われた。静岡県庁や三島信用金庫の職員と共に県立三島高校写真報道部、県立熱海高校報道部、日本大学三島高校新聞部員たちが一堂に会し、地域の未来について語り合った。

### 地を知る 養蚕も

今回の議題は「静岡東部・伊豆地域の将来を考える」で、具体的には「東部で暮らしたい、戻って来たい」という思いをどう実現させるか、という点に絞られた。土屋副知事は「地域活性化への取り組みを大人も子供も協力することが必要。市町の枠を越え、一つとなつて取り組んでいこう」と話した。また、「東部開港など、世界に発信できる話題も数多くある。それらの発信を促した新しい提案を模索する」とも話した。地域活性化への取り組みを大人も子供も協力することが必要。市町の枠を越え、一つとなつて取り組んでいこう」と話した。

### 新しい情報発信

若者が流出する理由として、都会には進学や就職の選択肢が多く存在するよう感じる点がある。これに対しては「出先で東部・伊豆地域の魅力を伝えてもらえるよう、まずは地域の人達を育成してはどうか」と話した。土屋副知事は「情報発信方法が多様化する現在、SNSはきつかけとして有効だが、新聞などの紙媒体は伝わる情報に

「あるかを発信する」(三島)「進学割合の高い高校の生徒にも地域の人と交流する機会を多く提供することで地元に残る者を増やせないか」(熱海)といった、今までの地域資源を他と結びつけて新しい魅力を発信することや、多くの人を巻き込んだ形での取り組みの向上を目指すといったことが話題に上った。また「今の若者たちはどういう職業に就きたいのか」ということにも議論が及んだ。地域にも魅力溢れる働き先があることを知らないという点も話題に上った。「県の公共施設や研究施設を東部地域へ誘致してはどうか」(三島)との意見も出された。県の研究機関は東部にも存在するが、中部に比べ



みんなで地域を盛り上げよう!

「深みがある」と話し、高校生は「新聞など今ある媒体も大切にし、興味を惹くようなものを同世代に発信したい」と「本日のような世代や立場を感えて意見交換する場が増えることを期待したい」と話した。

## 熱海の「空気と水のお医者さん」株式会社平和エアテック

### 観光を設備で支える

観光地である熱海市は平成27年度の宿泊者数が300万人の大台を越え(熱海市報)上り調子だ。昭和40年に創業し、今年で54年目を迎える株式会社平和

エアテックは、その躍進を支える会社だ。社長の相川守氏と専務取締役の相川毅氏に話を聞いた。

同社の主な業務はエアコンなどの空調設備や冷凍冷蔵設備、給排水衛生設備の設置やメンテナンスで、24時間対応、どんな故障も修理します。顧客に好評だ。大手のエアコンメーカー「ダイキン」の協力店でありながら直修

理が可能、メーカーに任せるとは異なるところで、社員で対応できることとが強みで、さまざまな業務で高い即応性を発揮している。「社員が多数の資格や技術の取得を通じて、成長できる会社でありたい」と

熱海の「空気(空調)と水(給排水)のお医者さん」を標榜する同社が、この熱海になくなったら困る、そう思われる会社でありたいとの思いが滲む。自分の仕事を誠実に行うことで社会に貢献する平和エアテックの姿は、若者にとって非常に富むものだ。



社屋の外観

### 社会貢献の在り方

「熱海に多数あるホテルや旅館にとって、空調や給排水設備のトラブルは可能な限り早く解決したいもの。だからこそ、いつでも駆けつけるのが社を認められるお取引先が多い」と語る。

熱海の「空気(空調)と水(給排水)のお医者さん」を標榜する同社が、この熱海になくなったら困る、そう思われる会社でありたいとの思いが滲む。自分の仕事を誠実にを行うことで社会に貢献する平和エアテックの姿は、若者にとって非常に富むものだ。

# 株式会社田方自動車学校



## T.D.S. 免許と資格のテーマパーク!

株式会社田方自動車学校は、東部や伊豆地域からの生徒が来る自動車教習所であり、地域貢献活動も積極的に行っている企業の一つだ。そこで、代表取締役社長小林淳一郎さんに会社の取り組みについて話を聞いた。

また、技能教習機関であるT.D.S.テクニカルセンターのセンター長の高田幸博さんに施設の特徴について取材した。

### 地域に密着した事業

#### 新たな取り組み

田方自動車学校は生徒に運転技術や知識を教えるだけでなく、様々な産業機械の資格の取得ができる技能教習機関であるT.D.S.テクニカルセンターの運営なども行っている。そこで小林さんにこれらの事業について聞くと「近年では運送業の人材不足が問題になっている。本校で資格を

#### 乗り物を通して

田方自動車学校の地域貢献活動の一つにT.D.S.フェスティバルがある。これは、屋外やパフォーマンスなどのイベントを田方自動車



▲笑顔で話す小林社長

取得し、県内の企業で活躍する人材を育成できたら嬉しい。多くの事業を通して、現代社会の課題や地域貢献に関わっていききたい」と語った。



▲田方自動車学校



▲教習コース

## 備えあれば憂いなし! 東部危機管理局

静岡県東部危機管理局は、地域の様々な災害に対して被害を最小限にとどめるための、「減災」を目指す活動を行っている。そこで、危機管理課の牧田晋吾主任に話を聞いた。

東部危機管理局は南海トラフ巨大地震をはじめ、静岡県に想定される様々な災害から県東部を守るための防災機関だ。防災活動の中には、高校や特別支援学校に outreach して行われる防災講座があり、これにより児童生徒の防災意識向上を目指している。そこで、講座を担当している牧田主任に「地域を守る」という仕事について話を聞いた。



▲説明する牧田主任

牧田主任は「講座を受けた児童生徒が学んだ知識を家族や友人に広めていくことで、災害時にひとりでも多くの人が助かるかもしれないと考え、自分の仕事に誇りを感じたい」と想いを述べた。静岡県は東部に限らず地震などの災害が懸念されるため、他都道府県へ移住してしまっている人もいます。東部危機管理局は、防災対策や講座による防災意識の向上により、たとえ災害が起こったとしても「東部は安心だ」と心から思ってもらえるような町づくりを目指している。

学校の行い、地域の人と触れ合う機会を増やそうというものだ。小林さんに地域への思いを聞くと「周辺の路上で教習車を走行させられるのは地域の皆様のご理解があつたこと。フェスティバルなどで少しでも恩返しができるように」と語った。また、レンタルバイク

の運営や、バイクの講習会も開催している。車だけでなくバイクも車両の料金や維持費がかかるため、若い人は気軽に手を出しにくい。そこで小林さんは「バイクの講習会で実際に触ってバイクの良さを体感してもらおう」とも



玉掛けの講習を受ける生徒

導入することで、バイクに乗ることのハードルを下げようと考えたとその経緯を話した。

## 技能を学ぶ 多様な資格

## 人材育成

静岡県労働局長登録教習機関T.D.S.テクニカルセンターは、就職後すぐに役に立つ人材を育成するため、常設された技能教習機関だ。取得可能な資格は、玉掛け・フォークリフト・小型移動式クレーン・床上操作式クレーン・車両系建設機械・高所作業車など、約45種類。

日以内で取得でき、企業資格の知識がない人でも専門の講師が教えてくれるので安心だ。また、より短い期間で取得できる「特別講習」は新卒の高校生や大学生にオススメだ。

技能資格訓練を行うテクニカルセンターの主な取り組みとして、センター長の高田さんは「本施設で資格を学ぶ生徒は、県内からの受講生が多い。そのため、資格を取った生徒たちが資格を利用して、県内で働くことを手助けして、地域貢献に繋がっている。これらの資格は、すぐに修了証が交付されるため、取得当日から働けるのも魅力だ。今まで本施設が輩出した資格取得者は累計で数千人に上り、中には有名企業に就職を決めた人もいる。今後他企業との連携を、層強め、実践力と更なる人材育成を目指し、地域に輩出していきたい」と教えてくれた。

# 株式会社 アイティエス

## 小粋な会社 うぶすな紙



うぶすな紙を開発した石渡さん

三島市梅名に本社を構える株式会社アイティエスは、主に工場・オフィス・土木現場などで業務の効率化を図る、ICT技術によるサポートをしている。

### ICTで効率化

三島市で情報サービス業を行う株式会社アイティエスの常務取締役石渡陽次さんに、会社の概要や、地域貢献のために取り組むことについて話を聞いた。

創業の理念は「地元生まれが地元で安心して働ける企業づくりだ。この理念は、創業者の一転勤母と、地元ですとやりたい仕事を働けるように」という思いが込められており、積極的に人事採用にも繋がっている。

石渡さんは「我が社は、裏で支える仕事を、日々やりを持って働いている」と語る。三島に本社を置き、さざり丸紙・東京・名古屋・京津の営業所を持っている。そのため、アナログエスは広い地域で多岐にわたる事業を行っている。

名刺に付加価値を  
名刺はビジネスに欠かせない存在だ。それと同時にコスト削減の対象でもある。そこに目を付けたアイティエスは、この名刺に価値を付けた「うぶすな紙」を開発し、それを名刺に利用することを提案した。この「うぶすな紙」は捨てられずに、再利用できる。また、地域活性化にも役立つ。紙の裏面に、地域の魅力を発信している。この紙で作られた



▲うぶすな紙を使った製品



戸田の魅力について語る山田さん

郷土愛溢れる戸田のまち。努力を惜しまないまちの人々が高足ガ二、戸田の魅力を伝え続けている。

株式会社光徳の代表取締役山田隆継さんに取り組みについて話を聞いた。

また、沼津市商工会の戸田での活動も追った。



▲高足ガ二料理



▲迫力ある高足ガ二

高足ガ二は、深海の珍しい力二であり、大きくて食べごたえがある。かつては、衰退の途を辿っていた戸田。この状況に対して光徳の代表取締役の山田さんは「このままだといかない、戸田を変える」という思いから立ち上

り、地域全体と協力し、高足ガ二を売りに観光客を集めている。戸田で食べることができ、高足ガ二の最大の魅力は、捕獲した高足ガ二を深海と同じ環境をつくりあげた水槽の中に入れ、おいしさを保ち新鮮なままお客様に提供されている。温度調整やために水槽の水を替えるなど、美味しさへの努力を怠ることなく続けている。

また、大人気の冷凍商品「高足ガ二ポシヨ」は七年の月日をかけて、冷凍しても美味しく食べられるように研究を重ねて生み出した。この「高足ガ二ポシヨ」は三島信用金庫が主催する夢企業大賞で特別賞を受賞し、注目を集めている。

現在、戸田では観光客を呼ぶ多くの工夫をしている。その一つに「漁船からカモノに餌をやる体験があり、観光客の楽しみの一つになる。来てくれた人が行ってよかった、また行きたいと思えるようなまちなししたい」と意気込んでいる。

このように活動から、まちの人々の戸田を楽しい場所にしていくという思いが伝わった。今日の前にある課題に全力で取り組む姿が発展へとつながる。その人々の姿こそ、地域と企業が織りなす戸田の魅力である。

様々な活動  
高足ガ二の人気により、最近では戸田の観光状況は変化している。観光客は衰退期の3倍となり、現在は国内だけでなく中国からの観光客も増加している。山田さんは「戸田全体が同じ認識を持つことで、もっと盛り上がる。来てくれた人が行ってよかった、また行きたいと思えるようなまちなししたい」と意気込んでいる。



カモノのえさやり体験

# 株式会社 光徳

## 故郷の味 足の長い救世主

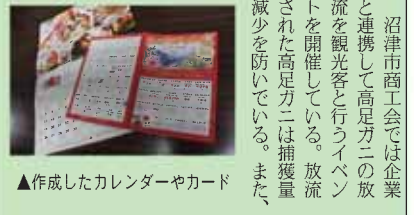
沼津市戸田にある株式会社光徳は、戸田の発展と共に歩み、高足ガ二の美味しさをたくさんの人々に届けていく。

高足ガ二は深海の珍しい力二であり、大きくて食べごたえがある。かつては、衰退の途を辿っていた戸田。この状況に対して光徳の代表取締役の山田さんは「このままだといかない、戸田を変える」という思いから立ち上り、地域全体と協力し、高足ガ二を売りに観光客を集めている。戸田で食べることができ、高足ガ二の最大の魅力は、捕獲した高足ガ二を深海と同じ環境をつくりあげた水槽の中に入れ、おいしさを保ち新鮮なままお客様に提供されている。温度調整やために水槽の水を替えるなど、美味しさへの努力を怠ることなく続けている。



▲光徳 かにや外観

## 沼津市商工会 おもてなし



▲作成したカレンダーやカード

沼津市商工会では企業と連携して高足ガ二の放流を観光客と行うイベントを開催している。放流された高足ガ二は捕獲量減少を防いでいる。また、田独自で制作し、言葉の壁を越えて、積極的にコミュニケーションを取る努力を地域全体で行っている。

商工会は、その他にも戸田をアピールする観光マップやカレンダーなどで、多くの人に戸田の良さを発信している。

## 郷土愛を育む

山田さんは「戸田で生まれ育った若者たちが都市部に進学、就職したとき戸田に生まれ育って良かった、戸田が好きだと思ってくれたら嬉しい」と話した。そのために戸田の子どもたちが中学校を卒業する時には沼津法入会戸田支部と企業が、協力し、高足ガ二料理新しい戸田を盛り上げを振る舞っている。故

# .tree (ドットツリー) 修善寺

# 新しいカタチの賃貸住宅

2016年3月、伊豆市修善寺に新たに誕生した「.tree (ドットツリー) 修善寺」。そこは単なる賃貸住宅ではなく、様々な業種の事業者が集い、伊豆の総合商社のイメージを持って活動している。

「.tree (ドットツリー) 修善寺」(以下ドットツリー)は、2016年3月に誕生した「住居」と「小規模オフィス」をセッ

「生コン工場跡地を利用」  
そんなドットツリー誕生のきっかけは、700



オシャレな作りのオフィス

坪あった生コンクリート工場の跡地の活用をオーナーである株式会社古藤田商店社長、古藤田博澄さんが考えていた時のことだった。古藤田さんはその跡地で何か地域の役に立つことはできないかと考え、職場と住居をセットにした賃貸住宅事業を思いついたという。

## 「商いの力で地域を元気に」

古藤田さんは「このドットツリーはNPO法人と民間企業が連携して事業を行い、商いの力で地域を元気にしていく」として始まったものです。どんな人たちが入居するの

「この紙面を制作して分かったことは、人口減少が進んでいる静岡県内でも特に人口流出が激しい伊豆・東部地区では、各企業や団体が今以上に人口減少対策に尽力が必要ということだ。」

「左表は国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」(平成25年3月推計)を基に資料作成」



ドットツリーを運営する古藤田商店社長 古藤田博澄さん

## 「場の雰囲気が良い」 ～ドットツリー入居者の声～



実際に入居している植松さん(左)と中江さん(右)

実際に入居している事業者の方々に、普段の仕事内容やドットツリーで生活するメリットなどについて取材した。

入居者の方々は突然の訪問にも快く応じてくださった。翻訳家の植松雅子さんは「オフィスがあるのが仕事しやすいです。また、仕事の人間関係のつながりが広がり、中江章喜さんは「江戸時代の御朱印めぐりが伊豆にも存在していることをPRする仕事をしています。常に、どのようにしたらわかりやすく伝えるかを考えています。ドットツリーは説明の拠点として使用させていたいです。」

ここは場の雰囲気が良く、様々な業種の方がいらつしやるので、その方たちのアドバイスで情報発信の方法を工夫することができると話した。

## 伊豆・東部地域 解決のため若者の力を

## 編集後記

取材させていただいた企業の方々をはじめ、多くの方々の協力を受けてことができました。特に三島信用金庫の担当の方には大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

この紙面は、伊豆・東部地域の人口減少問題や地域課題に正面から取り組んでいる地元企業について発信できる内容になったと思います。

まだまだ未熟な点も多いですが、この紙面を通して伊豆・東部地域の過疎化に対しての様々な取り組みを少しでも知っていただけたら幸いです。

## ドットツリー 成功の理由



NPO法人 サプライズ 飯倉清太さん

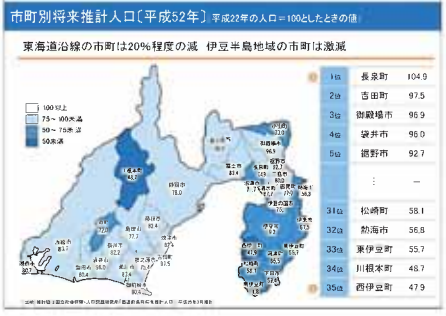
株式会社古藤田商店とともにドットツリーの運営を行っている、NPO法人サプライズの飯倉清太さんは「僕は元々地域活性化などの仕事をやっていたのですが、古藤田さんと『会議はしてもカタチにならないことが多い』と話をしていたのがドットツリーを作ろうと思ったきっかけです。ドットツリーを視察に来てもらえるように情報発信しました。地方でも仕事が成立する方が、このプロジェクトに興味を持ってくださった方々へ情報を絞り発信することで、不特定多数に発信したときより2倍、3倍

もプロデュースが成功したと思います。フェイスブックで情報を発信して人々を集められたのは古藤田さんと自分の人脉という土台があったということも一つの要因です。そういった土台がなければ信用し

てもらえないし、声も掛けてもらえなかったと思います」と話した。

また、飯倉さんは2014年から内閣府が認定するまちづくりの専門家である「地域活性化伝道師」という肩書を持つことになるものです」と話した。

「一面担当」  
県立熱海高校報道部  
「二・三面担当」  
日本大学三島高校新聞部  
「四面担当」  
県立葦山高校写真報道部



市町別将来推計人口(平成52年) 平成22年の人口=100としたときの値

東海道沿線の市町は20%程度の減 伊豆半島地域の市町は激減

この紙面を制作して分かったことは、人口減少が進んでいる静岡県内でも特に人口流出が激しい伊豆・東部地区では、各企業や団体が今以上に人口減少対策に尽力が必要ということだ。

「左表は国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」(平成25年3月推計)を基に資料作成」

この紙面を取り上げた「ドットツリー」は伊豆・東部地域で人口減少に取り組む企業や団体の代表格だろう。新しいコンセプトの賃貸住宅を運営し、事業者を集め、交流の場として活用している。この取り組みは全国的にも注目されてきている。伊豆・東部地域という場所でのような事業を展開することは、人口減少に歯止めをかけるきっかけにはなっていないだろうか。

そもそも人口減少というのは減少速度を遅くすることはできても止めることは難しい。しかし、対策をしなければ減少する。方々。少しずつ減少速度を遅くするためにも、働く場所を増やすための取り組みが重要だ。その中心となるべきは将来を担う若年層だ。進学で地域外に行く人も多いと思うが、伊豆・東部地域で就職、または起業して、進学先で学んだ成果を発揮することも選択肢の一つとして考えてもらいたい。そして、伊豆・東部地域の人口問題を解決していく協力者として共に活動してほしい。